

第4回懇話会での主な意見要旨と対応表

項目	主な意見	対応方針・考え
(1) 都市計画マスタープラン ・全体構想 (素案)	・ まちの発展と規制との釣り合いが取れておらず、特に住居系の用途地域の見直しの必要性がある。例えば、第一種中高層住居専用地域など、第一種住居地域に見直すなど地域の意見や状況に応じて変更を検討すべき。	・ 都市計画基礎調査の結果により、建物の既存不適格の状況などを勘案し、現況と乖離している部分など、定期的に見直しを行ってきた。本計画においても「社会情勢に応じて土地利用を見直す」こととしており、今後、この土地利用方針に基づき、政策的な視点からも用途地域の見直しを検討する。
	・ 中部地域の工業団地(長慶寺や長江地区)では、敷地の拡張にあたっては、区画道路がしっかりしていない、住宅や農地が混在するなど支障がある。高岡北インターチェンジの広域交通網を活かし、小矢部川の左岸も合わせて、工業団地の新設が必要である。	・ 本計画においても、ものづくり産業については重視している。今回お示した戦略的道路構想の中には、中心市街地と高岡北インターチェンジへのアクセス向上を目的としたものを含めているほか、高岡北インターチェンジを含む高速道路インターチェンジ周辺については、計画的に開発を推進・促進する地区に位置付けている。新たな工業団地の必要性については、まずは既存の工業・企業団地の活用を進めた上で、当地区に求められる機能や周辺状況等を総合的に勘案しながら検討したい。
	・ コンパクトなまちづくりにあたり、基本的には、既存の工業団地内での低未利用地の活用や建て替えなどで対応することが第一だと思うが、農業の後継者がいなくなっている現状もあり、一定程度の工業団地の必要性はある。	
	・ コンパクト・アンド・ネットワークのまちづくりにより、拠点間のネットワークがより便利になるというような説明をすると分かりやすい。また、都心エリアの5つのゾーンについても、徒歩圏を考慮した設定などであればわかりやすいし、そうした徒歩圏を意識すると各ゾーンに必要な施設が見えてくる。	・ 拠点間のネットワークは、城端線・氷見線の直通化の検討などネットワークの充実に取り組んでいるほか、都心エリアの区分は「たかおかストリート構想」で示した「歩いて楽しいまちづくり」の徒歩圏とも連携している。現在、サイン(案内・誘導看板)の整備等を進め、拠点間・ゾーン間を徒歩や公共交通で有機的に繋いでいきたい。
	・ 歴史・文化資産を活かすため、まずは市民に歩いてもらい、観光客にも歩いてもらうことが重要である。歩いて楽しいまちづくりの推進の誰をターゲットとしているのか。まちなかでも歩道が無いなど冬は雪で歩くことができないなど危険な状況も有る。	・ 都心エリアと伏木地区では、ストリート構想を策定し、市民や観光客をターゲットとした“歩いて楽しいまちづくり”を進めている。観光客に楽しんでもらうため、まずは市民が歩くことが重要であり、山町・金屋道路や瑞龍寺道などで歩車道分離やカラー舗装などの取り組みを進めてきており、今後も勝興寺寺内町や旧北陸道福岡地区でも取り組みを進めていきたい。
	・ 成長から成熟社会へ向けては、日常ファーストを掲げ、大規模な都市開発や施設に多額な費用をかけるのではなく、歴史・文化を活かしながら、伝統文化と現代文化が融合した高岡ならではの新たな独自文化を模索することや、小さな仕掛けを随所に設けて、それらを点で繋ぎ、線や面に拡げていくべき。	・ 本市では「知る・創る・つなげる・伝える」の4つの戦略を掲げ、高岡の文化を活かした創造や交流の場づくりを進めている。歩いて楽しいまちづくりを進めるためには、行政のみならず、市民、事業者やまちづくり団体等がそれぞれの役割分担のもとに協働で取り組みを進める必要がある。今後ともこうした関連した取り組みや関係団体等と協力しながら「歩いて楽しいまちづくり」を進めたい。
	・ 西部地域(福岡地区)からは、新高岡駅へのアクセスに時間がかかることから、道路整備方針図に福岡地区から新高岡駅への戦略的道路が位置付けられたことで西部地域の利便性はよくなる。	・ 戦略的道路は、現段階では構想であり、福岡地区から新高岡駅へのアクセス向上については、他路線も含めた必要性や優先度を見極めながら検討を進めたい。
	・ 富山大学芸術文化学部では、地域と連携して空き家をリノベーションをする授業もあり、大学に空き家を提供してもらえれば何か検討できるのではないかな。	・ 本年度、市では空き家等対策計画を策定し空き家対策の基本方針や実施体制を整えた。本年度から中心市街地活性化協議会におけるリノベーションまちづくりの取り組みなどにおいて富山大学などの関係機関と連携しながら、空き家の活用について取り組みを推進したい。

項目	主な意見	対応方針・考え
(1) 都市計画マスタープラン ・全体構想 (素案)	- 観光客には、単にまちなみを見てもらうだけではなく、交流することで地域が活性化されるため、市の玄関口である新高岡駅と高岡駅間を万葉線でつなぐなど、アクセス向上は重要である。 - 公共交通に関して、例えば市役所と市民病院の間に路面電車を走らせて、氷見線と接続する等、市役所や病院へのアクセスを向上させることが必要である。	公共交通については、都心交通軸や都市交通軸の充実をはかることとしており、「誰もが市内を円滑に移動できる交通体系の構築」を掲げている。現在まで、高岡駅と新高岡駅のアクセス向上のためのシャトル6の整備や、高岡やぶなみ駅の設置などを進めてきている。現在、JR城端線・氷見線の直通化へ向けた取り組みを推進するほか、万葉線の延伸に向けた課題解決に努め、交通事業者と連携して公共交通の維持・充実を図る。
	若者を呼び込むきっかけとなるのが大学であり、住みよいまちであれば高岡市に根付くことも考えられる。大学への公共交通の便も悪いほか、夜は街灯も無く危険である。ものづくりなど芸術分野に触れられる富山大学芸術文化学部をどう活かすかが重要である。空き家についても大学と地域が連携してリノベーションする授業も有るので、何か検討できるのではないか。	本市では、市内外に関わらず大学との連携を進めており、富山大学芸術文化学部についても地域に積極的に出て、まちづくりに深く関わっていただいているほか、様々な分野で政策提案をいただくなど連携を進めている。今回の空き家の活用についても連携について検討したい。
	高齢者が歩いて暮らせるエリアと、若者が文化を残すエリアなど、もっとコンパクトに考えてもよいのではないか。大学生に都心エリアに住んでもらえるような取り組みが必要である。	11月に実施した市民意見募集においては、多くの学生よりバスの運行本数増加や交通ネットワークの再編など学生が利用しやすい公共交通の確保や駅前の商店街などに若者向けの店舗などを望む声をいただいた。「コンパクト・アンド・ネットワーク」の実現へ向け、若者にまちなかを魅力に感じてもらい都心エリアに住んでもらえるよう、新たなコンテンツづくりに取り組みたい。
	空き家の多い地域は、住宅地、道路も含めて区画整理を行い、適切な道路幅員の確保や整形な区画とし街区を再生し、次の世代の方が大きくなって住みたいと感じさせるまちにすべき。	行政・権利者・民間事業者それぞれで役割分担をしながら、まちづくりの将来イメージを具体化し、民間活力を主体とした開発を基本に取り組みを進めたい。
	古城公園を、きれいな水と緑の空間に再生し、魅力を付加することで、民間投資も呼び込んでほしい。	現在、史跡としての古城公園の整備基本計画を策定している。今後、史跡としての「保存活用」と、都市公園としての「保全活用」の観点から、地域別構想の中で方針を位置付ける。
(1) 都市計画マスタープラン ・地域別構想の地域区分	伏木と牧野では、それぞれ地域特性が異なり、将来をどう描いていくか。地域ごとで人口を維持する場合の現実的なシナリオを描き、誘導に向けたKPIを明確にし、実現性の高い計画を期待する。	地域別構想の中では、地域別の人口の将来推計の結果をお示しするなど、まずは将来像について共通認識を持った上で、構想をまとめたい。
	地域別構想では、厳しい現実を市民に伝え、住民自らが将来人口を含む将来像を理解し、その解決策を自ら考えるための仕組みづくりが必要であり、全国で広まりつつある小規模多機能自治のような取り組みを推進すべき。	全国の先進事例については、今後のまちづくりの中で研究したい。都市計画マスタープランでは、描いた将来像を実現するための方策を位置付けることとしており、市民、事業者、市の3者がどのような役割分担のもと、取り組みを進めるかを盛り込みたい。
	コミュニティづくりは、戦略的賃貸住宅誘導論に代表されるように、ディベロッパーが住宅販売だけではなく子育てコミュニティの形成をビジネスモデルとして検討する時代になっており、こうした動きを踏まえる必要がある。この実現へ向けては、行政の影響力は大きく、市場調査を行うなど、それへ向けたトリガーとなる新たな仕掛けが必要である。	現在、見直しを進めている住宅マスタープランの中でも、子育て世代のニーズにどう対応するかという視点に重点を置いており、その中で取り組みを検討したい。

項目	主な意見	対応方針・考え
(1) 都市計画マスタープラン ・地域別構想の地域区分	福祉や子育てなど他分野の地域区分を勘案する必要がある。	地域別の将来像の検討に当たっては、今回設定した地域区分を超えての周辺地区や隣接市などとの様々な連携や繋がりを踏まえ示す。
(2) 立地適正化計画 ・基本的な方針 ・誘導区域の考え方	このままいくと近い将来、インフラのメンテナンスが出来なくなる可能性があることを市民に公表し、家の建て替え時の移転をお願いする必要があるのではないのか。	公共施設の再編を進めるとともに、インフラの新規整備から計画的な維持管理へシフトすることとしているが、農村や郊外にも地域コミュニティや歴史・文化などがあることから現状のインフラは維持する。なお、居住誘導についても強制ではなく、居住環境を整備しながら、新たに転居される方々などを緩やかに誘導したい。
	周辺市街地では、地域コミュニティや、お祭りなどの歴史・文化を守っていくための支援が必要である。	周辺市街地に地域生活拠点を設定し、居住や都市機能を誘導することとしており、誘導施設や誘導施策も含めてお示しする。
	居住誘導に関して、歴史的な町並みが存在するまちなかに若い人を集めないといけない。なぜその地域に住もうと思ったのか、なぜまちなかではなく郊外を選んだのかといったことを調査する必要がある。また、将来的に各地域の人口がどうなるかを予測した上で、例えば多くの人口を要する野村地区などの周辺の市街地にどの程度人口を集めるのかといった検討が必要である。	今回、居住誘導区域は、公共交通の利便性に加え、まちなか居住地域や歴史まちづくりの重点地区を区域設定の基本的な考えとしており、そこでは一定の人口密度を維持したいと考えている。居住地域の選択の理由については、総合計画や住宅マスタープランの策定の際に調査した結果を反映したい。
	都市機能の配置の検討に当たっては、近年の自動運転技術の進展や、生鮮食品や日用品の移動販売サービスや、弁当の販売業者による高齢者の見守りサービスなど民間ベースの新たな取り組みなど、日常生活サービスのあり方が変化している観点を踏まえる必要がある。	自動運転技術については、将来的に実用化が進み一定程度普及することは考えられるが、車を利用できない人は公共交通を利用されることから、それを前提とした都市づくりを進める必要がある。また、都市機能の配置の検討に当たっては、そうした新たな生活サービス(送迎・移動販売サービス)を踏まえた。なお、本計画は定期的に見直すこととしており、そうした技術の進展についても勘案したい。
	- 高次都市機能は、広域都市拠点への配置が必要であるが、地域生活拠点においては、徒歩圏内で生活できるような高齢者にやさしいまちづくりが必要である。 - 子どもの通学や日常生活での買い物などは都心エリアが便利である。若い人は郊外に出ていくかもしれないが、高齢者にとってはまちなかの方が便利である。 - プライマリ・ケアの役割を果たす診療所は身近な地域への配置が望ましい。 - 福祉や子育て機能は、市内に幅広く分布していることが望ましい。 - 少子高齢化に伴い、子供の数は著しく減っており、長期的にみると地域差も出てくる。そうした情報を把握した上で、施設の充実が必要になるのか検討をすべき。 - サービス付高齢者向け住宅は、歩いて外出する機会も考慮し、まちなかに配置されていることが望ましい。 - 大学はサテライトとして広域都市拠点に設置するという方向性もある。	今回、自動車を利用した生活を中心としつつも、広域都市拠点や地域生活拠点を利用しながら徒歩と公共交通を利活用するようなライフスタイルを提案している。都市機能の配置については、その考えを基本に、今回いただいたご意見や関係機関・関連計画における考え方も踏まえお示した。